

一夜だけのハロウィン

普通野沙衣子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

10月31日。それはハロウインの夜。「ねえ、きみもひとり？」そう声をかけられるところから始まる。これはふたりの恋の物語。

目次

一夜だけのハロウィン

1

一夜だけのハロウィン

「ねえ、キミもひとり?」

10月31日の夜のこと。

友達を誘って夜の街へ繰り出そうとしていたけど、揃いも揃って予定があるらしい、デートでもするのだろうか。

1人だからといって年に一度のイベント事だ、家に閉じこもってでは損した気分になる。その空気を少しでも感じるため、私は夜の街へ歩きだした。

賑わっている所に来てみたのはいいが、1人ではその空気に乗り切れずに、つかれてしまった。私は賑わいを避けて、ゆっくりできるような場所に来ていた。

そこでこの人に、話しかけられた。

「まあ、そうですね、1人です。」

「へえ、こんなところで何してるの?」

「なにをしているという訳でもないですけど、ちよつとした休憩です。」

「じゃあ暇かな?、少しお話でもしようよ。隣、座るね。」

ぐいぐい来るひとだなあ。

それからいろいろな話をした、年齢や身長、自己紹介で言いそうなことはほとんど聞かれたと思う。それに私は淡々と答えるだけだった。定型文のような言葉をつらつらと。

私に何かを聞きたびに、自らのことも話してくれたので、私のことを知られたぶんだけ、この人のことも知ることはできた、と思う

それと同時にどこかで会ったことがあるような、そんな気がしてきた、思い違いだろうけど。

「昔話をしてもいい？」

「聞きますよ」

「ありがとう、今よりもずっと小さい時の話なんだけど。幼馴染みがいてね、その子とハロウィンに遊んでただけだし、楽しくて楽しくてたまらなかつただけど、その日から今日まで一度も会えてないの。」

「何かあったんですか？」

「遠くにいつちやつたんだ」

「それは寂しいですね」

「ほんとうにね…。」

さきほどまでとはうってかわって、とても悲しそうに話すこの人に、私はどう返答す

ればよいのやら。

そしてこの空気を変えるために話題を変えてみることにした。

「あの、後ろのこれ、やったことありますか？」

「ああ、クレーンゲーム。あまり得意じゃないけど、キミは得意なの？」

「少しだけ。」

「よし、やってみようよ」

ガラスの向こうには、可愛らしくデフォルメされているコウモリや黒猫など、ハロウィンらしい人形が沢山。

「じゃあやってみるね」

表情ががらりと変わり、真剣だけど、楽しそうな眼差しでアームを動かしていた。

そして1回目、

「ああ〜！おしい！」

2回、

「あ、あとちよつと」

3回、

「ああ…。」

チャレンジの回数だけがどんどん増えていった。

「とれないなあ…。よし、交代。次はキミの番だ！」

「まかせてよ」

今よりも小さいとき、お小遣いをもらってはゲームセンターでクレイジーゲームばかりをしていた記憶がある、むしろそんな記憶しかない。

そんな私に、1回でとることは簡単なことだった。

「まあこんなかんじです」

「まさか一発でとるなんて…。ねえ、コツを教えてよ」

「もちろん」

吸収がはやく、取り方を少し教えただけでなのに、たったの2回でとることができていた。

そういえば、小さいときに同じように取り方を教えたことがあったつけ、もうどんな子だったかはまったく覚えてないけれど、そのときは結構な回数を重ねて取っていたことを思い出した。

「本当にとれた！きみのおかげだよ！ありがとうね」

満足してくれたようでよかった。

「これあげる、教えてくれたお礼に」

「ありがとう。じゃあこつちを、取れた記念に」

「こちらこそありがと…。なんだか懐かしいな」

その顔は少しだけ寂しそうな、そんな表情をしていた。

「どうかしました?」

「なんでもないよ、ちよつと昔を思い出しただけ。それよりもさ、」

さつきとは一転し、とても楽しそうな顔になっていた。

「ねえ、ハロウィンって好き?」

「どうかな…。こういうお祭りみたいなのは好きかも」

「じゃあさ、ハロウィンしにいこうよ」

「ハロウィンしに行く?」

「そう、ハロウィンしに行くの、いろんな家をまわってお菓子をもらいに行くの、どう?」

「おもしろそうだね」

「よし、じゃあ決まり! さつそくいくよ!」

するとすぐに立ち上がり、駆け足気味で目的地まで歩いていく、見たことあるよあな、初めてのよあな、そんな道をいくつも通り、体力がなくなる前に到着することができた。

「じゃあここからいこつか!」

初めて見る家だった。

「知ってる人?」

「もちろん、キミもだけどね」

「え？」

「じゃあ押すよ」

「ちよつと」

そんな私の静止を聞いてはくれず、さつさとインターホンを鳴らしてしまった。私が知っているとは一体どういうことなのだろうか、そんなことを考えている暇もなく、扉は開いた。

「はい、どちらさまで…… あ！キミは！」

「あ、どうもこんばんは」

「おじいさん！はやく、はやくきてくださいー！」

「どうしたんだ婆さん…… おお！キミか！体は大丈夫だったか！」

なんのことだかわからないけれど。

「ええと、元氣です」

「そりや良かったよ」

私と夫婦との会話が始まった、少し話しただけでも人柄のよさが伝わってくる。

そして、私は夫婦と会ったことがあるということを思い出した、私が小さいときによく可愛がってくれていたことを。

この人も夫婦と面識があるんだと思い、その方を向いてみると、とても嬉しそうな、笑顔でこちらを見守っていた。

「そこに誰かいるのかい？」

「はい、ここまで案内してくれた人です、お二人も知っている人だと思います」

なぜか夫婦は不思議そうな顔でその方をみつめていた、そしてなにかに気がついたのか、その眼差しは温かいものへと変わり、目には涙をうかべていた。

「・・・どうしました」

「いや、なんでもないんだ、ちょっとまってなさい」

そういうとおじいさんは家の中へはいり、何かがはいっている袋を持ってきた。

「これ、持っていくなさい」

差し出されたのは袋いっぱいのお菓子だった。

「こんなにいっぱい、いいんですか？」

「もちろんだ、2人で仲良く食べてな」

「ありがとうございます」

「たくさんもらったね」

「そうだね、感謝しないとね」

「じゃあそろそろ次のお家にいこつか、いくべきところはあるからね」

「あなたは話さなくてもいいの？」

「うん、大丈夫、たくさん見せてもらったから」

どういふことだろうか、疑問に思っていると夫婦が話し出した。

「二人とも、まだ行くところはたくさんあるんだろう？夜が明ける前にはやくいつてきなさい。それと、うちにもまた来てな」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ、いこっか！」

私たちはその後もいくつかの家をまわり、同じような反応をされ、最初は忘れてしまっていた人もいろんなことを話して思いだし、最後にはお菓子をもらい、久しぶりの幸せな時間を送っていた。

そして夜明けがせまっていた。

「ここが最後だよ。」

「ハハハ…？」

「ここでもいいの」

「道路だよ？」

「わかってる、わかってるけど、少し時間がほしいの」

「もちろんいいけど」

すると、深呼吸を شدした。体を捻ったり、軽くジャンプしたりして、なにをはじめののだろうか。

「今から道路を渡るけど、キミはそこにいてね、絶対だよ、絶対。動かないでいままでとは違う。なにかを決心したようなそんな感じ。」

「あのときは2人ともだったけど、今日は1人」

あのとき、あのとき、いつのことだろう。

「じゃあ渡るから、動かないでちゃんと見てて」

道路を渡り始めてしまった。車が来ているのにもかかわらず。

「まってー！」

あれ、なんだろうこのかんじ、同じことがあったような。

違う、あったんだ、思い出したんだ。やっと、

小さい頃のこと、

「はやくー！おいてつちやうよー！」

「ま、まってよー…。」

前を歩いているのがあの子、後ろで息をきらしているのが私。

「ちよつと… やすませて…。」

「もう、しょうがなあなあ。ねえ、きょうはどうだった？」

「もちろん、ほんとにたのしかったよ！」

「じゃあさ、つきも、そのつきも、つぎのつきも、いつしよにハロウィンしよ？」

「うん、ずっといつしよ。ふたりでハロウィンしようね、やくそく」

そしてこの直後、2人で横断歩道を渡ろうとしたとき、

「一緒に車にひかれたんだよ」

道路を渡つたはずのあのこが、私の後ろに立っていた。

私は辛うじて生きてはいたが、記憶を失ってしまった、でもそれで済んだんだ、私は。

だってあの子は、

「そういうの、今日は無しにしよう？」

「でも」

私は顔をあげたが、かすんでしつかり見えない。今のあの子を覚えたいのに、いくら拭つても、すぐにじんってしまう。

「空を見てよ、明るくなってきた。もう夜は明けるね。」

「いやだ」

私にはわかってしまう。つきにあの子が話すと終わってしまうことを、いやだ、いやだ。

「ねえ、今日はどうだった？」

言いたくない、言いたくはないけれど、言わなきやだめだ。

「もちろん。楽しかったさ、ほんとうに！」

朝日が昇った。

街に昨日までの賑わいはなくなり、いつもの風景に戻っていた。おとといとは違ういつもの毎日が。

私は写真立ての前に、あるものを置いた。それはあの日に貰った人形と、あのときも買ったにんぎょう。それと9本の薔薇を。

これらを懐かしいと思うとき、そのときは街に出て、賑わいをさけてゆつくりとできる場所へいこう。そうしたらまた誰かに話しかけられるだろう。